

宮沢賢治とSDGs(1)

京都薬科大学 名誉教授 桜井 弘

ここ数年、シカ、イノシシ、サル、クマなどの野生動物による人的被害、作物被害や植生・環境への影響などが実に多く報道され、その度毎に心を痛めておられる人々が多いと思います。こんな中、今年(2021年)6月12日の新聞記事が目につきました。

約1年前に、東京都で1頭のシカが捕獲されて、安楽死させると伝えられました。ところが区役所に、抗議や批判が寄せられ、区役所は困惑しながら飼育施設を探したところ、ようやくある動物園が引き取り、命が助けられました。今年、そのシカが公開されて、愛称がつけられ動物園の人気者になっているそうです。心温まる話ではありますが、1頭のシカを保護する一方、全国では年間に数十万頭のシカが駆除されていることも伝えられて、「野生生物と社会」との複雑な関係を浮き彫りにしました。

この記事を読んで1週間後、北海道で、体長1.5メートルのクマが現れ、4人の人々が襲われたため、クマは直ちに駆除されたことが報じられました。同じ命を持つシカとクマですが、命への向き合い方がこんな大きな差があることに心が曇りました。

同じ夜に、何気なくTVニュースを見ていたら、1年前にクマに連れ去られて未だに行方不明となった男性の葬儀が行われたことが報じられました。タケノコ掘に出かけた北海道の男性が帰宅せず、自宅から500メートル離れたところにリュックと引き裂かれた長靴だけが残されていました。男性の長男は、心の整理がつかず、現実を受け入れることが出来ずにいましたが、1年後に葬儀を行いました。40年ほど前は、自宅のまわりには多くの人々が住み、牧場もあり、人と森の間には一定の距離がありました。しかし、次第に人々の数が減り、人と森との距離がだんだん短くなり、さらに1990年以後は春クマの駆除が廃止されて、クマが人間の生活圏に入って来たそうです。この1年間、長男はいろいろと考え、クマへの憎しみや怒りを越えて、野生生物と人間が共存できるような道を探ろうと決意したと語っていました。

宮沢賢治の「おいもり狼森とざるもり箕森、ぬすもり盗森」

このような事件や報道に接するたびに、私は宮沢賢治が著わした作品のいくつかを思い出し、自然と人間が共存できたであろう原初の姿の重要性を考えるようになりました。賢治の作品については、多数の研究者や愛好家が様々な角度や背景から解説や見解を發表されていますが、ここでは私なりの感想を書かせていただきます。今回は、とても面白いタイトルの「おいもり狼森とざるもり箕森、ぬすもり盗森」を紹介します。この童話は、賢治が生前に出版した唯一の童話集『注文の多い料理店』(図1)の2番目に収録され

ています。この童話集に、賢治は広告文に当たるような「新刊案内」を書いています。

イーハトヴは一つの地名である。強て、その地点を求むるならばそれは、大小クラーウスたちの耕してゐた、野原や、少女アリスが辿つた鏡の国と同じ世界の中、テパーンタール砂漠の遙かな北東、イヴン王国の遠い東と考へられる。

実にこれは著者の心象中に、この様な状景をもって実在したドリームランドとしての日本岩手県である。

おとぎ話のような名文が書かれています。クラウドは農民のことです。続いて、各童話の短い説明をしています。「狼森おひノもりと笹森ざるもり、盗森ぬすもり」については、

人と森との原始的な交渉で、自然の順違二面が農民に与へた永い間の印象です。森が子供らや農具をかくすたびに、みんなは「探しに行くぞお」と叫び、森は「来お」と答へました。

人と森の原始的な交渉を愉快に紹介しています。物語が始まります。

小岩井農場の北に、黒い松の森が四つあります。いちばん南が狼森おひノもりで、その次が笹森ざるもり、次は黒坂森、北のはづれは盗森ぬすもりです。

この森がいつごろどうしてできたのか、どうしてこんな奇体な名前がついたのか、それをいちばんはじめから、すっかり知ってゐるものは、おれ一人だと黒坂森のまんなかの大きな巖おほいばが、ある日、威張つてこのおはなしをわたくしに聞かせました。

大昔、岩手山が噴火してやっとなると静まるとやがて草が生い茂り、木が生え、4つの森が形成されたところから物語が始まります。ここで森は山をさしています。ドイツ語で森をWaltと言いますが、これも森林や山林をさしています。狼森、笹森、黒坂森と盗森は、ともに地図に書かれている実在の山々で、それぞれの標高は380、1360、400そして425メートルです(図2)。よく知られている小岩井農場が開拓されようとするごく初めのことと想像されます。ずっと北には、雄大な標高2038メートルの岩手



図1. 宮沢賢治『注文の多い料理店』
角川文庫(1956)



図2. 狼森、笹森、盗森、黒坂森、
岩手山、小岩井農場の地図

山が望めます。

ある秋の日、森のはずれの野原に、けらを着た4人の百姓たちがやってきて、入植地を探します。畑をすぐ起こせる、森に近い、きれいな水が流れている、日あたりがいい、地味もまあまあに住むのにふさわしい場所へやって来ます。おかみさん3人と子供たち9人もいます。そこで4人の男たちが、「幻燈のやうなけしき」の美しい山々に向けて声をそろえて叫びます。

「ここへ畑起してもいいかあ。」

「いいぞお。」森が一斉にこたへました。

みんなは又叫びました。

「ここに家建ててもいいかあ。」

「ようし。」森は一ぺんにこたへました。

みんなはまた声をそろへてたづねました。

「ここで火たいてもいいかあ。」

「いいぞお。」森は一ぺんにこたへました。

みんなはまた叫びました。

「すこし木^{きいもら}貰^{もら}ってもいいかあ。」

「ようし。」森は一斉にこたへました。

男たちはよろこんで手をた^{たく}き、さつきから顔色を変へて、しんとして居た女や子どもらは、にはかにはしやぎだして、子供らはうれしま^{けんぐわ}ぎれに喧嘩^{けんか}をしたり、女たちはその子をばかばか^{ばか}撲^むったりしました。

大自然の中に入っていく人々の自然への尊敬と畏敬の思いと喜びが感じられ、この物語のもっとも感動的な場面ではないかと思えます。賢治の自然と人々への思いが込められています。「畑を起こしていいか、家を建てていいか、火をたいていいか、すこし木を貰^{もら}っていいか」と、生活に必要なことをいちいち森に伺い、森はそれらの要求に対していちいち「いいぞ」や「よおし」と答えて了解します。人々の自然への深い思いが伝わり、現代の私たちがすっかり忘れていたことを蘇^{ひえ}らせてくれます。「けら」は、方言で「背ミノ」(背中につける雨具)のことで、藁^{わら}やまだ皮(シナノキ科の樹皮)できているそうです。

彼らは生活を始めます。やがて冬が来ますが、森は冬のあいだ、一生懸命、北からの風を百姓たちのために防いでやり、優しく見守ります。

1年目の秋を迎え、彼らは小屋を2つ増やし、蕎麦と稗^{ひえ}を収穫し、畑を増やして喜びました。ところが、土の堅く凍った朝、9人の子供のうち、小さな4人が消えてしまいました。みんなはあわてふためき、森に子供たちの居場所を尋ねると、森は「しらない。」と答えます。「そんだらさがしに行くぞお」と叫ぶと、「来お」と森はいつせいに応えて、来るなどは拒否をせず、来いと歓迎します。百姓たちが狼森に入ると、消えた子

供たちが9疋のオオカミたちと火を囲んでいるところを発見します。「狼どの狼どの、董しやど返して呉ろ。」と皆が叫ぶと、オオカミはびっくりして歌をやめ、火が急に消え、オオカミは「悪く思はないで呉ろ。栗だのきのこだの、うんとご馳走したぞ。」と叫びながら、森の奥へ逃げて行きました。百姓たちは消えた子供たちが、森でもてなしを受けていたことを告げられ、お礼として狼森に栗餅を差し出しました。狼森は、自然に感謝（返礼）してほしいと少し過激な行動で知らせたのでしょう。これも、私たちが日頃忘れていたことかもしれません。栗餅は自然の恵みである栗を使って人の手で心を込めて作られる餅です。栗の種類のかなかでも「もち栗」を使います。古代から米の餅と同様に作られてきましたので、人々にとって生きていくための貴重な食品であり、その上、特に焼いたときの香ばしい匂いと味は格別ですので、狼森は本当に食べてみたかったでしょう。

春になり、子供が3人生まれ、馬が2頭来て、森の木の葉と馬糞で肥料が完成し、粟や稗の収穫に恵まれ皆喜んでいました。ところが霜柱が立った朝、仕事に出ようとすると、農具がすべて消え、畑を広げることが出来なくなってしまいました。困った百姓たちが森に農具を知らないかと尋ねると、森は再び「知らないぞお。」と答えました。探しに行くぞと叫ぶと、来るなどは言わず「来お。」と言いました。狼森では何も見つからず、百姓たちは笹森に入りました。すると大木の根元に大きな笹が見つかり、開けてみると、消えた9個の農具とともに「黄金色の目をした、顔の真つ赤な山男」がバアと言いました。百姓たちが、こんないたずらはやめてほしいと頼んで農具を持って帰ろうとすると、山男は「おらさも栗餅持って来て呉れよ」と言って森の奥へ走って行きました。百姓たちは笑って狼森と笹森に栗餅をこしらえて差し出しました。

3年目の夏となり、野原は全て畑になって、小屋は大きくなり納屋も出来ました。馬が3頭になり、大豊作となって百姓たちは喜びました。ところが、霜が一面に降りたある朝、納屋の粟が全部消えていました。村は大騒ぎになって、森に粟はどうしたかと尋ねると、森は「知らないぞお。」と答えました。探しに行くぞと皆が叫ぶと、来るなどは言わず、「来お。」と言いました。狼森と笹森では粟は見つからなかったため、百姓たちがさらに進むと、黒坂森は怪しい影が盗森のある北の方へ飛んで行ったので、北へ行ってみると言い、栗餅は要求されませんでした。その話を聞いて百姓たちが盗森に怒鳴り込むと、「まつくろな手の長い大きな大きな男」が出てきて、自分を盗人だというやつはみんな叩き潰してやると百姓たちを脅しました。

百姓たちがひるんだ時、銀の冠をかぶった岩手山が「いやいや、それはならん。」と厳かに言い、「ぬすとはたしかに盗森に相違ない。おれはあけがた、たしかにそれを見届けた。しかしみんなもう帰ってよかろう。栗はきつと返させよう。盗森は、じぶんで栗餅をこさえてみたくてたまらなかったのだ。それで栗も盗んで来たのだ。」と仲裁に入りました。百姓たちが村に帰ると栗が確かに戻っていましたので、4つの森にそれぞれ

れ栗餅を差し出しました。

岩手山は、“賢者”のような役割を果たしています。確かに、盛岡市から眺める岩手山は、威厳があり、人々を包み込むようなおおらかさを感じます。物語の最後はどうなるだろうかとハラハラしますが、このクライマックスで岩手山がすべてを解決してくれたのです。

さてそれから森もすっかりみんなの友だちでした。そして毎年、冬のはじめにはきつと栗餅を貰いました。

しかしその栗餅も、時節がら、ずぶぶん小さくなつたが、これもどうも仕方がないと、黒坂森のまん中のまつくろな巨きな巖がおしまひに云つてみました。

こうして、人々は自然からたえず恩恵を貰って、それにたいして感謝の印として栗餅を差し出し、自然との共生をはかり、平和に暮らしていくのです。自然に抱かれて生活する人々の貴重な食品である栗餅を、森に差し上げ自然とともにいただく共有の気持ちの大切さも、ここには感じられます。人は自然の一部であることを決して忘れないようにと示してくれています。

最後の、栗餅が次第に小さくなっていったのは、また心配の種ですが、月日や年月が経つにしたがって自然への尊敬が少しずつ忘れ去られていくようです。賢治は未来の人々に警告しているのかもしれませんが。黒坂森は「仕方がない」とおおらかに語り、物語を読む私たちを少しほっとさせてくれます。

SDGsと宮沢賢治のころ

最近、新聞、雑誌やTVなどSDGsという言葉を見かけられると思います。SDGsは、エス・ディー・ジーズと発音されます。英国で始まった産業革命は人々に様々な恩恵をもたらし、近代科学の進歩とともに生活は向上しました。しかしその後、産業・科学の急激な発展に伴って、地球環境がしだいに悪化し、社会や政治も複雑化して、暮らしの困難な地域も増えました。人類の活動の結果として、世界の貧困、紛争、気候変動、感染症などの問題が次々と人類に向けられ、人類はこれまでになかった数多くの課題に直面しています。

このままでは、人類が安定してこの地球で暮らし続けることができなくなる、次世代の人々にこの美しい地球を残していけるだろうかと心配されています。このような危機感から、世界中のさまざまな立場の人々が話し合い、課題を整理し、解決方法を考え、2030年までに達成すべき具体的な目標を立てることにしました。それが「持続可能な開発目標(Sustainable Development Goals:SDGs)」です。「持続可能とは、何かをし続けられる」ということです。SDGsは、私たちがひとつしかないこの地球で暮らし続けられる「持続可能な世界」を実現するために進むべき道を整理して示していると思います。

詳しく述べますと、持続可能な開発目標は2001年に策定されたミレニアム開発目標(MDGs)の後継として、国連加盟193国が2016年から2030年の15年間で達成するために掲げた目標です。2015年9月の国連サミットで加盟国の全会一致で採択され「持続可能な開発のための2030アジェンダ」として記載されました。2030年までに持続可能でよりよい世界を目指す国際目標です。17のゴールと169のターゲットから構成され、地球上の「誰一人取り残さない(leave no one behind)」ことを誓っています。(国連本部から出版されている「SDGsポスター 17のアイコン日本語版」をご参照下さい。)

この17のゴールを見てみますと、先ほど紹介しました賢治の童話「^{おいもり}狼森と^{ざるもり}箕森、^{ぬすもり}盗森」には、いくつかが当てはまる項目があるように思われます。たとえば、「11 住み続けられるまちづくりを」、「12 つくる責任 つかう責任」、「15 陸の豊かさを守ろう」、「16 平和と公正をすべての人に」などですが、見方によってはまだいくつかが挙げられるかも知れません。

この童話が掲載されている童話集『注文の多い料理店』は、1924年(大正13年)12月、賢治が花巻農学校の教諭をしていた28歳の時に自費出版されたものですが、約100年も前に、賢治は自らの体験に基づいて自然と人との共存を考え、解決方法を提示して、人々に語ろうとしていました。あるいは、人間の未来を予測して、自然を尊敬して、自然を畏敬して、日々を楽しく暮らしていく大切さを訴えたかったかも知れません。

さらに、SDGsでは、地球上の「誰一人取り残さない(leave no one behind)」ことを誓っています。この誓いは、賢治が1926年(昭和元年)30歳で教諭を辞めて農村生活に入り、「羅須地人協会」を立ち上げた時に著わした『農民芸術概論綱要』の「序論」からの言葉を想い起こさせます。

「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」

賢治は、100年も前にSDGsの世界を目指していたように思われます。賢治の作品は、今を生きる私たちに明日への示唆を与えてくれるようです。

桜井 弘

日々のできごとはホームページから。いつでもどこでも科学館とつながれます。

